

第四号：第六十九首～第一百五首

おやさと研究所嘱託研究員

深谷 耕治 Koji Fukaya

第四号 69 から 115 までを以下にまとめてみよう。

「権威を恐れずに、『おふでさき』で知らせてある神意をしつかりと悟ってほしい。そうすれば身の悩みも速やかに治まる(69～73)。『つとめ』についてもはじめは『手おどり』、次に『かぐら』と教えて、その完成に向かって細々と道をつけているが、怠りがちな人間の心からその道にはいつしか雑草が生い茂っている。早く真の道をつけてほしい。そうすれば将来は何かから何まで陽気になる(74～77)。それにしても、とりわけ近隣の村人たちを一刻も早く救ってやりたい(78)。

親神にとっては、世界中の人間は皆わが子である。だから、すべての者は皆、神を親と思えよ(79)。世間一般でも色々道と道を説いているが、目に見えたことを説いても根元の理合いを知らない。神を信じる子どもは、その思いを世界に知らせるために、この道の真なるものを求めよ。学問では分からないこの世界の『元の理』を覚えておく(80～89)。

この世界はじまって未だかつてない『つとめ』を教えるが、それによって病気が治るだけでなく、そもそもそういった病気になる根本原因が断たれ、世界を丸く治めて救っていくのである(90～95)。神のこのはやる気持ちは口では言うに言えないが、しかし、説かなければ誰も分からないであろう。この道は難しいように思うが、通り抜けたならいつまでも陽気な世界が続いていくのである(96～103)。

これからは、権威ある者も下にいる者も、身に悩むところを与えて、一様に心の掃除をしていく。そして、上に立つ者でも親神の教えにふれたなら、皆と寄り合って神意を話し合ううちに、これこそ本当に頼もしい教えであると悟る者もあるだろう(104～115)。」

さて、今回学んだことは、親神を疑う人間の心のありようである。四号のこの箇所では、「学問」と「村方」(近隣の村人)という言葉が近くにあり、ともに親神の話の間こうとしない立場を表している。

まず、学問についてであるが、一般的に、学問すれば、知識の量が増えて、物事を観る視野が広がり、その洞察が深まる。そして、この世界のあり方についての的確に表現していると思われる説明に何度となく出会っては、世界の真理にふれた感覚を得る。しかし、教祖は、人間がそうして積み重ねてきた学問とは違う言葉で真理を語られた。そこで、教祖の話聞いた者は「その話が本当なら、学問は嘘か」と問う。すると教祖は、「学問に無い、古い九億九万六千年間のこと、世界に教えたい」と仰せられた。つまり、教祖が教えたかったことは、自分では知りえない自分の出生にまつわる真実のようなもので、人間の知恵や経験では分からない人間自身の根元についてである。

しかし、学問の言葉で世界の真理にふれた感覚を持つ者にとって、その言葉を手離すのは容易ではない。というのも、学問の真理そのものは時代によって変動するが、歴史を生きる人間にとってそれを真理として担保している知者の時勢の権威からは容易に逃れられないからだ。その権威を振り切つてまで教祖の言葉を信じようとはしない。その信じたくない気持ちが「学

問に無い」ということの意味を取り損なわせて、その人をして教祖が言わんとすることを体験させようとしな。そこで、ある者は学問だけで十分としてこの世界と人間の根元については不可知の立場をとって教祖の話に耳を傾けようとせず、あるいは、ある者は教祖の話に耳を傾けつつも学問が捨てきれずに、学問では捉えられないはずの根元について学問の言葉で無理に理解しようとする。そうして、やがては「眼に見えないものは信じられない」という考えが生まれて、極端な場合には教祖のことを「神経病」として医者に掛からせようとするのである。

また、近隣の村人は、別の仕方で教祖を疑う。彼らは必ずしも学者ではなく、学問の言葉を使うわけではない。しかし、彼らは“生活の経験”で世界の真理にふれているといえる。生活のなかで人間の機微を学び、生業を通して自然の運行を知り、神仏に手を合わせる中で眼に見えないものについて経験する。そして、そうした生活の真理もまた生活の長や「世間の常識」によって権威づけられている。そこで、彼らも教祖の話に耳を傾けない。それは「眼に見えない」からではなく、むしろ、根元を説く人が女性の姿として「眼に見える」からである。『教祖伝』で知られるように、教祖が通られた道中で、幾度となく親戚や近隣の村人が「神様はこのように難儀させるものではない」と言つて教祖の“非常識さ”を非難している。彼らの生活の経験に照らせば、教祖の言うこととされることが神であるはずはなく、そこには一人の女性・主婦・女房がいるばかりである。そこで、教祖がこの世の根元についてどれほど教えても、「眼に見える現状は神のすることではない」という考えが先に立ってしまい、極端な場合には教祖のことを「狐憑き」として嘲り罵った。

こうして、大まかに見ると、親神という“眼に見えない”根元的な存在は、「眼に見えないものは信じるに値しない」という考え(学問)や、「それが女性の姿をしてこんなことをするはずはない」という考え(近隣の村人)によって強く否定されることが分かる。親神は、なんとしても「つとめ」を実のあるものにして、この世界を陽気な世界へと立て直してやりたいと念願している。しかし、人間というものは、具体的な権威に影響され、“眼に見えた今のこと”に執着する。人間はそうした具体的な影響から逃れられず、次第に、本来清らかな心も生活の中で垢づいてくる。その心の垢、心のほりこりがやがて“眼に見えた今のこと”だけに意識を向けさせて、「学問にない、古い九億六千年間のこと」を説く教祖を疑わせてしまうのである。

そこで、「おふでさき」は、「権威を恐れずに、ここで知らせる神意をしつかりと悟ってほしい」と述べて、さらに「身に悩むところを通して、その者の心さえ清められたなら、たとえ権威の世界に身を置く者であっても、親神の思いは感得することは必ずできる」と論じている。そして、「学問では分からない根元の理合いにもとづいた『つとめ』を完成させる道はなかなか容易ではないが、近隣の人々をふくめて必ず世界を根元から陽気にする」と歌われている。こうして、今だけのことに囚われる心を解き放ち、心が掃除されて「おふでさき」の言葉を素直に信じられると、眼に見えないはずの根元を目の当たりに拝することのできる不思議が味わえるのだろう。